昨年５月には、兵庫県宝塚市にある介護付老人ホームに移り住んでおられた藤本先生が、花井先生、大島先生、今井さん（地域がん登録全国協議会主事として長く協議会事務を担当）と私の４人を招いて下さり、お元気そうな藤本先生にお目にかかれ、楽しいひと時を過ごすことができました（写真はその時のもの）。その際にも、藤本先生が後進の私共に向けて下さっている思いやりの深さに感謝せずにはおられませんでした。

藤本先生のこうした慈愛に満ちたお人柄は、これからも永遠に私どもの心から離れることはないと思います。藤本先生が残された精神は永遠に生き続けると確信します。我が国のがん登録、がん疫学に大きな足跡を残された藤本先生、本当に有難うございました。

賛助団体（2009 年 2 月 1 日現在 21 団体　敬称略、順不同）

㈶日本対がん協会　㈶大阪対ガン協会

明治安田生命保険相互会社　第一生命保険相互会社
アメリカンファミリー生命保険会社
㈶大同生命厚生事業団　日本生命保険相互会社

第一三共株式会社　アストラゼネカ株式会社
富士レビオ株式会社　大鵬薬品工業株式会社
伏見製薬株式会社　堀井薬品工業株式会社
ワイス株式会社　シェリング･プラウ株式会社
大塚製薬株式会社　株式会社ヤクルト本社
中外製薬株式会社　ノバルティスファーマ株式会社
グラクソ・スミスクライン株式会社

サイニクス株式会社

**藤本伊三郎先生を偲ぶ**

## がん登録と歩まれた歳月

**花井　彩**
地域がん登録全国協議会　顧問

藤本伊三郎先生をお偲びし、本稿ではがん登録分野での先生のご活動の経緯を述べたい。

藤本先生は、1961 年、大阪府立成人病センター調査部に調査課長として赴任された。間を置かず、同部（部長は関悌四郎大阪大学公衆衛生学教授が兼務）は、府および府医師会と共に、大阪府悪性新生物患者届出事業を企画、準備し、事業は翌年に発足した。私は先生より半年早く着任していたが、最初は府の事業と同時にスタートした成人病センター所内がん登録を主担した。所内登録がほぼ軌道に乗った頃、藤本先生からお誘いを頂き、大阪府がん登録のチームに参加することになった。藤本先生は終始、得られた登録データの利用こそが事業の命であると考えられ、完璧なデータを待つ間にも、利用可能なデータをもって多方面に活用する道を選ばれた。がん検診の評価など衛生行政への利用、がん疫学への利用、重複がん発生機序の研究、届出医療機関へのデータ還元と病院がん医療の評価、等々の諸研究と事業の実践を可能としたのは、一つは先生のデータ利用の考え方、二つには重複票を同定する照合作業の自動化を成功させられたことにあったと思う。これにより、がん登録資料を外部データと結合し、外部要因の発がん（がん死亡）リスク評価が容易となった。

当初照合作業には藤本、大島先生、私を含め全課員が参加したが、このノウハウを集め、セミコンピューター化照合システムの完成を見た（大島先生の文章参照）。1981 年に Dr. Harald Hansluwka（WHO がん統計課長）は、WHO の会議「発展途上国におけるがん統計」日本開催時に、全参加者と本システムを見学、研修された。また平山雄先生（国立がんセンター疫学部長）から、このシステムを、日米がん研究協力事業によるワークショップ「がん疫学における統計手法」（1984 年、於広島）で紹介するようにという要請を受けられた。人口が大きい神奈川県および千葉県のがん登録では、大阪のものをモデルとした照合システムが開発された。

他方、1972～74 年、藤本先生は厚生省がん研究助成金による「がん診療機構の現状分析とがん登録を主軸とするその効果的システムの確立に関する